212

二〇一七年度　入学試験問題

経済学部A方式Ⅱ日程・社会学部A方式Ⅱ日程・スポーツ健康学部A方式

二限　国　語　（60分）

〈注意事項〉

一　試験開始の合図があるまで、問題冊子を開かないこと。

二　解答はすべて解答用紙に記入しなさい。

三　マークシート解答方法については下記の注意事項を読みなさい。

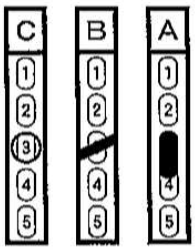
マークシート解答方法についての注意

マークシート解答では、鉛筆でマークしたものを機械が直接読み取って採点する。したがって、解答はHBの黒鉛筆でマークすること（万年筆、ボールペン、シャープペンシルなどは使用しないこと）。

一　記入例　解答を3にマークする場合。

(一)　正しいマークの例

(二)　悪いマークの例



枠外にはみださないこと。

○でかこまないこと。

二　解答を訂正する場合は、消しゴムでよく消してから、あらためてマークすること。

三　解答用紙をよごしたり、折りまげたりしないこと。

四　問題に指定された数よりも多くマークしないこと。

〔一〕 つぎの文章を読んで、後の問いに答えよ。

今日、日本の医療現場で、次のようなことには困難を伴うという。例えば末期がんの患者に「あなたの余命は長くてあと二ヶ月です。残りの日々をどのようにすごしたいのかを知りたい」と余命を宣告し希望を聞いたうえで、終末期の医療を話し合うこと、そして患者の了解を得たうえで医療者が終末期医療の計画を立てることなどである。医療にかかわる人びとからその難しさがたびたび報告されている。そこで、そのような終末期の患者における①インフォームド・コンセントをめぐる困難の原因の一つが、日本における「死者」の観念とかかわると述べると、それは意外なものと受け取られるに違いない。

しかしここで論じるように、民衆仏教の教理さえもはや縁遠いものとなっていて、自ら「無宗教」「無シンコウ」と確信している日本人であるが、現在もなお、自分の家族、親族、友人、同僚、同窓生などの知人の死に際しては、死者儀礼に参加し時間や金銭を消費することをそれほど厭わない。 A 亡くなった人に対して何もしないことに、大きな罪悪感さえ抱いているようにみえる。そして、通夜や葬式だけではなく、伝統的に儀礼のシリーズとしておこなわれてきた四十九日、初盆、一周忌などの死者儀礼にも可能な限り参加する。長年会うことのなかった同窓生が死亡していたことを、同窓会の人びとが数年たってから知り、互いに誘い合って亡くなった人を祀る墓に詣でることさえある。

こうした行為は、「人も参加しているのに自分だけ行かないのは義理が悪い」と思ったり、陰で非難されるのを避けようとしたりする社会的行為としての面があることも確かである。しかし、自分と亡くなった人との関係を死者儀礼によって確認したり、その関係を周囲に知らせたりすることによって、結果として、亡くなった人の「存在」を浮かび上がらせるという面のあることを見逃すことはできない。②現代に生きる私たちの多くは、例えばアンケート調査で「死者は存在すると思うか」と問われれば、「否」と答えるだろう。まして「死者とは何者であり、いかなる存在か」という質問に対しては、その問いの意味さえ理解しないに違いない。しかし、親しい人や家族の誰かが死んだ場合、しかも突然死んだような時に人びとがとる行為の多くが、あとで述べるように、 B 「死者」は存在するかのようで、死者儀礼における自分の行為は死者に対して直接おこなうもの、

働きかけるものと現在でも想定されている。さらには、自分のそうした働きかけを、死んだ人が知っていることさえ想定しておこなわれることがある。「死者」の存在を確信しているかのような残された者の行為は、航空機事故や大規模災害の犠牲者の遺族たちの行為にとくに顕著である。③こうした場合の遺族は、世代も社会的背景もバラバラであるにもかかわらず、多くの人びとが大変似た行動をとる。これらのことから、死者儀礼の変化は確実にかつ広汎に起きてはいるが、それでもなおかつての人びとがそうであったように、「死者」の存在を信じる気持ちが残っているのではないかと考えられる。死者儀礼の変化は段階的に起こるので、同じ家族、同じ職場、同じ地域であっても、人によって個々の死者儀礼での体験は異なる。そのこともまた、変化が段階的にしか起こらない要因かもしれない。そうした変化のありようが、以前の人びとの観念が少しずつ次の世代へ伝えられる要因として働くのであろう。

ところで、想定される「死者」とは、現在でもなお儀礼の中では一挙に「生者」から「死者」になるのではなく、いくつもの段階を経て徐々に「死者」になっていくことを示している。しかも、「死者」としての地位ないし属性を与えることができるのは、儀礼の執行者でもある亡くなった人の家族や血縁者である。

終末期の①インフォームド・コンセントを得るための説明は、それが医療者によってどのように丁寧に同情や思いやりに満ちた表現でおこなわれようとも、そして専門家としての権限によってそれが告げられたとしても、きわめて近い将来の死について当人に知らせることは死の宣告以外の何物でもない。死の宣告とは、「生者」が「死者」となるのを想定することを意味しており、それが当人にもたらす(イ)ソガイ感はたとえようもなく大きいに違いない。日本人が、生物学的な死が確認されたあとで、段階的に「死者」となっていくと考えているならば、生物学的な死を予見されることは、生きていながら「死者」となっていく最初の段階を踏まされることになる。

④ある患者が予想される余命の期間を告げられた時、それを告げた医師に向かって「失礼な」と叫んだことがあった。主治医にとっては真に心外な反応であったに違いないが、医師の①インフォームド・コンセントを得るための説明は、当人にとってはもっと心外な内容であったろう。なぜなら、それがよりよい終末期医療の計画を立てるための医師の行為であったとしても、「生

者」を「死者」に移行させうるのは、医療行為ではなく、死亡した人の家族や血縁者による死者儀礼をとおしてであると多くの人は考えているからである。

現在、日本人の死の観念の大部分は、「死者」の観念によって成り立っているとする筆者の立場から述べることにする。

六〇代の女性が久し振りに会った知人に次のように言った。「昨年親を続けて見送りまして、淋しくなりました。でも肩の荷を下ろしてホッとしています」。

この人が述べた内容は、昨年続けて親が死に、淋しくはなったが、老親を抱える負担がなくなりホッとしているということである。［ C ］「見送る」という言葉は、亡くなった人の身近な人が、亡くなった人を目的語に、自分を主語にして「(私が亡くなった人を)見送る」という意味で慣用的に使われたのである。しかしよく考えてみると不思議な表現である。「見送られた」人はいったいどこへ行くのか。また「見送る」人は、具体的にどのように亡くなった人を「見送る」のか。

この表現と似た意味をもつのは、おそらく「死出の旅立ち」という表現であろう。この場合には「旅立つ」主体は死者であり、行く先は漠然としてはいるが、おそらく死者の世界である。この表現が含むところの意味は、死ぬということはつまり生者の世界から死者の世界へと移り住むことであり、そのコウテイ(ウ)を「死出の旅」と称しているのである。こう考えると、「見送る」と「旅立つ」とは一対の表現であることがわかる。そこには、死ぬことはその人が消えてなくなることではなく、存在が無になることでもないという合意を見出せる。

ところで、こうした慣用表現のもとになっている死者の存在や死者の世界についての観念は、どの程度私たちの間にまだ残っているのだろうか。葬儀社が整えてくれる死装束はいまだに巡礼者あるいは修行者が身に着ける旅装をなぞっている。白の帷子(かたびら)に白の手甲脚絆(てこうきゃはん)、そして頭陀袋(ずだ)である。「死出の旅」にふさわしい身なりである。しかし、二〇〇四年現在、遺族の多くは、死者は死者の世界へ旅立ち、今後は死者の世界に住み続けることになると考えてはいないだろう。仮にそうした考えを保持していても気づかず、深くは考えずに、ただ慣習として「見送る」という表現を使っているだけかもしれない。

ところが、現在でもおこなわれている地域はわずかに残っているにすぎないが、半世紀近く前までは、多くの場合通夜や葬

式はまさに死者を死者の世界へと送り出す意味をもつ、こまごまとした数多くの儀礼のシリーズから成っていた。儀礼は、死んだ人をそれまで住んでいた世界から死者の世界へと、残された人びとが「送って」いくのであり、それらの人びとは途中で引き返し再び生者の世界へと戻ってくるが、死者はそのまま死者の世界へと旅立っていき、以降は死者の世界にとどまるということを象徴的に示すもので満ちていた。

具体的には、遺体は墓地へ運ばれ埋葬され、生者は、死者とどんなに親しい関係であっても、また遺体をそこに置き去りにすることに激しい悲しみや抵抗を感じても、決してうしろを振り返ってはならず、また行きとは異なる道をたどって住居のある空間へと戻らねばならなかった。それは死者の霊魂が生者や生者の世界にミレン(エ)をもよおし、生者について戻ってこないようにするための行為とされた。儀礼の多くは、死者に自らが死者であることを納得させ、以降、生者には盆行事や彼岸などの定められた時にのみ接近できるが、それ以外は生者とは異なる世界に住まねばならないことを理解させるのを目的とすると説明された。

例えば、今でも多くの地域でおこなわれているが、自宅から棺を運び出す時、死んだ人が生前使っていた茶碗を門口でわざと大きな音をたてて割る。それは死んだ人へ「戻ってくるな。戻ってもお前の食事のための茶碗はないぞ」と知らせるための儀礼だと、かつては説明されていた。［D］、「見送る」とは遺族が具体的行為として死を看取るだけでなく、死の直後から儀礼をおこなうことを意味するのであり、こうした意味や目的をもついくつもの儀礼を含んだ総体、あるいはシリーズとして葬儀がおこなわれていたのである。

（波平恵美子『日本人の死のかたち――伝統儀礼から靖国まで』より。ただし原文の一部を変更した。）

問一　A ～ D の空欄を埋めるのに最も適切な語をそれぞれの選択肢の中から一つずつ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

A　a だから　b なるほど　c むしろ　d とはいうものの　e というのも

B　a あたかも　b そのため　c おかげで　d だから　e そういうわけだから

C　a ましてや　b そして　c だから　d けれども　e 結局

D　a そもそも　b なるほど　c しかしながら　d とはいえ　e つまり

問二　傍線部①のインフォームド・コンセントに関する説明として、つぎのa～eから、あてはまらないものを一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

a　終末期医療に関係する。

b　死者儀礼のために必要である。

c　医師と患者の間で行われるものである。

d　説明は慎重に丁寧に行われる。

e　説明する人は、なかなか意図を理解されず困ることが多い。

問三　傍線部②「現代に生きる私たちの多くは、例えばアンケート調査で『死者は存在すると思うか』と問われれば、『否』と答えるだろう。」について、その理由としてふさわしくないものをつぎのａ～ｅの中から一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

ａ　自分と亡くなった人との関係は死者儀礼によって確認できるから。
ｂ　魂が存在することは、科学的に確かめられていないから。
ｃ　死者を見たことがないから。
ｄ　死者に触れたことがないから。
ｅ　幽霊が本当に存在するとは思っていないから。

問四　傍線部③「こうした場合の遺族は、世代も社会的背景もバラバラであるにもかかわらず、多くの人びとが大変似た行動をとる。」について、似た行動として予想されるものとして述べたつぎのａ～ｅのうちから、ふさわしくないものを一つ選び、解答欄にマークせよ。

ａ　死者の亡くなったと思われる場所が、到達の難しい場所であっても、そこを訪問する。
ｂ　死者の遺品を入手しようとする。
ｃ　死者の遺骸を一部なりとも保全しようとする。
ｄ　亡くなる直前の死者の様子を知ろうとする。
ｅ　死者の霊魂が現場に現れるのに怯(おび)える。

問五　傍線部④「ある患者が予想される余命の期間を告げられた時、それを告げた医師に向かって『失礼な』と叫んだことがあった。」について、患者がどうしてそう叫んだのか、課題文の文脈に即して説明したつぎの文の空欄［ア］～［コ］に当てはまる語を文の後のa～lから最もふさわしいものを選び、その記号を解答欄にマークせよ。同じ語を何度使ってもよい。

［ア］にしてみれば、［イ］が［ウ］に予想される余命を告げることが、［エ］が［オ］の生死を決めるかのように思われたので、失礼な、と叫んだのである。患者を「［カ］」とするのは、［キ］が行うことではなく、［ク］の近親者が［ケ］を行うプロセスを通じてであると［コ］は考えていたからである。

a　生者　　b　死者　　c　医師　　d　終末期医療　　e　周辺の人々　　f　子ども
g　看護師　　h　病人　　i　余命　　j　死者儀礼　　k　患者　　l　宣告

問六　「死者」があたかも存在しているかのように行われる人々の行為として述べたつぎのa～fのなかから間違っているものを一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

a　遺体には頭陀袋を持たせる。
b　遺体を埋葬してから、死者の自宅に帰るとき、うしろを振り返らない。
c　墓地で埋葬後、門口で死んだ人が生前に使っていた茶碗を割る。
d　面倒を見ていた親族が亡くなることに「見送る」という表現を使う。
e　遺体を棺に入れるとき、白い帷子に白の手甲脚絆をまとわせる。
f　墓地から帰るときは、棺を運ぶときとは別の道を選ぶ。

問七　本文の内容に合致するものをつぎのａ～ｇの中から二つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

ａ　医師は、末期ガン患者がどのような終末期を迎えたいかの要望を訊きたいと思うが、なかなか難しいので、訊かないですませることもある。

ｂ　死者があの世、すなわち死者の世界へと旅だった後、生者は二度と死者に接近することはかなわない。

ｃ　死者は、亡くなったときにはこの世にまだ存在しているが、そこから、死者の世界へと旅立っていく。これは「死出の旅立ち」と呼ばれるが、死者の家族や血縁者は死者がよみがえることを心から願う。

ｄ　白の帷子（かたびら）に白の手甲脚絆（てこうきゃはん）、頭陀（ずだ）袋という入棺の際の死体に付ける扮装は、死者が旅に出るという考え方を示すものであるが、死者だけがまとう扮装である。

ｅ　知らない間に高校時代の友人が数年前に亡くなっていると知ったとき、友人たちと墓参りに行くのは、行きたいと考えて行く場合だけでなく、つきあいで行くという場合もある。

ｆ　死にまつわる死者儀礼を行って、死者の家族や血縁者は、死者を一気に死者の世界へと送り込むことを試みる。

ｇ　人々は、死者がいると思うかと尋ねられれば、いない、と答えるが、現在死者に対して行う儀礼では、死者の存在を前提として、死者を死者の世界へと送り出すかのような行為が行われる。

問八　(ア)～(エ)のカタカナに最も適切な漢字を、つぎの各群からそれぞれ二つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

(ア)　シンコウ

a 信　b 進　c 真　d 神　e 親　f 振

g 康　h 好　i 仰　j 交　k 興　l 行

(イ)　ソガイ

a 祖　b 訴　c 素　d 租　e 阻　f 疎

g 外　h 概　i 害　j 涯　k 崖　l 凱

(ウ)　コウテイ

a 公　b 行　c 工　d 肯　e 高　f 校

g 庭　h 定　i 邸　j 訂　k 程　l 低

(エ)　ミレン

a 満　b 看　c 末　d 身　e 実　f 未

g 煉　h 連　i 倫　j 廉　k 斂　l 練

〔二〕 つぎの文章を読んで、後の問いに答えよ。

日本映画がトーキー（発声）映画化を通して技術的・産業的、芸術的に著しく成長した一九三〇年代は、植民地帝国日本が総力戦の体制を準備し中国大陸に戦争のサイ(ア)カをもたらした時代、いわゆるファシズム化の時期に合致する。三〇年代の日本映画を戦争と切り離して議論することは不適切なのである。映画史研究者ピーター・B・ハーイの大著『帝国の銀幕』や映画評論家佐藤忠男の『キネマと砲声』といった著作が依拠するのはそうした認識に他ならない。そして、日本における最初の本格的トーキー映画『マダムと女房』の登場と満州事変の勃発が同じ三一年であることを考える時、「声」をもった日本映画が戦争に向かう国家に従い、戦争プロパガンダを作って奉仕するようになるという流れを思い描くことは歴史的素養と想像力があればそれほど難しくない。映画産業は統制を推進した国家官僚に取り込まれ、日本映画は戦時国家のプロパガンダ装置になった。この理解は巨視的には間違いない。しかし、同時に注意が払われねばならないのは、三〇年代の日本映画が実際には政治レベルの不吉な変化にそれほど素直に同調したわけでなかったことである。むしろ社会が平和にしか見えない映画ばかりが製作されていた。ここで着目するのはその点である。

確かに日本の映画製作は、一九三一年（昭和六）の満州事変、続く三二年の上海事変が生んだ戦争ヒーローを称揚する事変映画を粗製乱造した。日本映画が他のメディアと共に事変ブームに便乗し戦争を煽(あお)り立てたことは間違いない。では、その後の三〇年代の日本映画が同時期に進行するファシズム化を一貫して明示的に証拠立てているかと言えば、決してそうではない。軍事的であれ経済的であれ中国大陸への帝国主義的野望と呼べるもの、日本が膨張する植民地帝国であることを如実に示すもの、あるいは、そうした要素ゆえの政治的不穏さ、国内政治のぐらつき、言論弾圧の閉塞感を暗示するものを、同時代の劇映画に探し出して時代の徴候として確認しようとすれば当てが外れる。そもそも満州事変後の日本映画は、その直前に流行った左翼思想にも、それまで戦場だった中国大陸にもすっかり関心を失ってしまったのだ。

では、日本映画は何に関心を向けたのか。三〇年代における近代性である。近代性はきわめて多義的な言葉であり、国民の

民主的政治参加、科学的・機械的な産業合理化、中産階級と大衆消費の拡大、変容する資本主義社会における主体の構築と日常生活のスタイルまで意味しうる。さらに日本のような非西洋社会においては、近代化と西洋化を同義として語る場合もあれば、近代化が反西洋と国粋主義を招来した文脈を考慮すべき場合もある。日本における近代性は［　A　］に西洋からの影響と緊張関係を意識せざるをえない。これらを背景としながら、三〇年代の日本映画がモチーフとしたのは、大衆化された消費の文化①モダン・ライフである。かつて二〇年代のモダン文化の担い手は、先進的な欧米文化の情報にアクセスできた先端的知識人・中流階級以上の富裕層からジェンダー規範を逸脱するモダン・ガールまで社会の少数派だった。彼らの美学的・芸術的実践を通して西洋的洗練と新しさを認識させたモダン文化は、三〇年代には都市を中心に拡大され大衆化された消費の文化となった。これがモダン・ライフである。日本映画はモダン・ライフの表象を通して同時代に生きる人々の感覚、「今」をつかんで伝えることを目指したのである。

日本映画は不況の二〇年代を忘れ、人々が平和と消費を享受する三〇年代のモダン・ライフの多面性を視覚化することに熱中した。これは左翼思想の徹底排除をめざしたケンエツ(イ)の強化だけに帰すべき現象ではない。政治的には暗殺やクーデターに脅かされながら、日本経済は満州事変後に好転して三〇年代半ばには戦前最高のピークを迎えた。この好景気と並んで、当時の文化の活況を強調する人々の記憶に対応するものが、日本映画における「平和に見える」社会の表象である。ファシズム化が進んだとみなされる時期の表象が「平和に見える」というのは悪い冗談のようだが、三〇年代の日本映画はその表象のゆえに、政治的認識の位相から捉えて同年代の社会全体を「暗い谷間」とのみ形容することに断固として異議を申し立てるユニークな史料である。重ねて言えば、政治史を一切参照せずに当時製作された劇映画を見ることによって三〇年代の時間的推移をたどるなら、三七年の日中間の戦争勃発を予期させる要素はほとんど見あたらない。まして戦争が中国大陸からアジア全域・太平洋へと地理的に拡大する必然性はどこにも存在しない。日本映画に反英米言説が展開されるのは四一年一二月のいわゆる太平洋戦争開始のずっと後のことである。

だからと言って、私は三〇年代の日本映画が戦争に抗するスタンスで平和的なものだったと主張する気はない。平和に見え

る非政治的な映画を、三〇年代の映画製作者が同時代の政治的現実に向けて密かに仕掛けた批判や抵抗と解するのは必ずしも適切ではないと考える。私が問題にしているのは、この時代の日本映画が、戦争に接近する社会でなく、ごく平和に見える社会を集合的に呈示し続けた現象である。平和に見える社会の表象の根底に日本の資本主義のありかたへの支持があることを問題にしている。この平和に見える社会の表象がむしろ戦争と共犯性をもっていたのではないかと疑っているのだ。

②三〇年代は日本の資本主義が近代化した時期であり、戦後日本の技術立国・企業社会を準備する過程となった。恐慌を経験しながら満州事変後に各国より早く経済を回復した日本では、経済成長と国防を意識したさまざまな官民のプログラムが導入され、産業構造を変容させた。重工業の発展は、「工場労働者」の指示内容が明治以来、［B］を牽引してきた紡織の女工でなく、製鉄の男性職工へとシフトしたことを意味し、男性主役時代の到来を際立たせる。映画を含む各産業における経営の合理化、資本の集中やカルテルによる競争調整は大会社をより大きく強力にした。定年制度の導入を含め雇用の近代化が進む一方、大会社勤務のサラリーマンとそうでない者の待遇格差はすでに歴然とした。バス車掌からOL化した事務職まで女性が就労するショクシュ(ウ)が増えながら男性との差別賃金が当然視された。都市と農村とは常に対立する組み合わせとして言及された。

このような不均等が存在しながらも、三〇年代の経済好況は二〇年代からの長期不況下で人々が抱いた革命願望を吹き飛ばした。都市の家庭には電気・ガスが設置され、市民生活のなかに食堂のカレー・ライス、喫茶店のコーヒーを楽しむ余裕があり、消費活動はデパートでの買い物から観光旅行まで拡がりを見せた。人々は現状維持、もしくは経済的発展への期待をもって、社会階層に応じた各自のモダン・ライフを追求するようになったのである。消費は人々に自身で個性化した自由を感じさせ、束の間の解放感を与えたかもしれない。

日本映画はこの人々に向けて、同時代日本の資本主義を称揚することに明け暮れた。ユーモラスな音楽映画の未来志向と［C］がその代表だ。また時には、モダン・ライフの明るさと対照的な負け組の翳(かげ)りを鮮やかに表現する作品があり、不運なヒロインを描くお涙頂戴(だい)の女性向け映画もカタルシス[注1]を提供した。

そして男性主役の現実社会と違って、また男性スター中心の時代劇映画の世界とも異なり、職場より家庭空間が前景化されるモダン・ライフの現代劇映画ではモダン・ガールである女性たちが重要な役回りを担った。これが三〇年代映画のイデオロギー効果を考察するうえで女性たちに格別の注意が向けられる理由である。ここで確認を要するのは、サイレント映画の二〇年代とトーキー映画が主流化した三〇年代では、モダン・ガールと言ってもインパクトの度合いが異なるということだ。スクリーンのモガ(モダン・ガール)表象は、社会における反逆的少数派から穏健的主流派へという変容を通して、二〇年代と三〇年代の連続と断絶を象徴するユニークな指標である。

日本映画は礼賛モードの支持であれ、諦観モードの追随であれ、スクリーンにおいて同時代の資本主義を肯定し続けた。この傾向は三七年七月以降の日中戦争期、統制経済の導入を含む社会全体の再編が進む中でもケイ(エ)ゾクした。秀作と評価される戦争映画が製作されるようになっても、戦争映画が多数派となってスクリーンを独占することはなく、日本の映画製作は戦時下での空気を読み取りながら、一九四〇年までモダン・ライフというテーマを放棄しなかったのである。これは何を意味するのか。

本論で着目するのは、モダン・ライフを称揚する映画と戦争映画の［D］が示唆するような、資本主義と戦争の関係である。モダン・ライフは本質的に個人が消費を通して自分流のモダンを模索する私的生活文化である。したがって、当時の人々が私領域の自律性としてのモダン・ライフを手放したくなければ、戦争を断固としてキ(オ)ヒする反応があってもよさそうなものだが、実際には日本人は国家と一体化して中国に対する戦争を支持した。しかも、これまでの歴史研究が明らかにした通り、日中戦争下で人々はモダン・ライフを手放さなかったのである。観光や消費が勢いを失わずに伸びたように映画の［E］も続いた。モダン・ライフを続ける余裕があった社会では、日露戦争をはるかに凌駕する死者と傷痍兵士の帰還をもってしても、戦争に反対する声が大合唱になることはなかった。侮っていた中国人の死ばかりか、日本人兵士の大量死も身体障害者の発生も日本社会を必ずしもおびやかさなかったということである。当時の日本国民にとって日中戦争は、日本の戦勝によって東洋平和の建設という響きの良い理想を実現し、日本人に大きな現実的利益をもたらす「約束手形」であったと形容

できるかもしれない。戦争によって最終的に平和と繁栄が実現されると約束されている間、モダン・ライフを続けつつ「誰かの死」を許容することは可能であり、戦後のさらなる豊かさの到来を期待しよう、というわけである。日中戦争という約束手形は、こうした日本人の、根本的には資本主義的合意によって裏書きされ続けたと言えよう。

（宜野座菜央見『モダン・ライフと戦争――スクリーンの中の女性たち』より。ただし原文の一部を変更した。）

注1　カタルシス　悲劇を見て涙を流したり恐怖を味わうことで、心の中のしこりを浄化させること。

問一　傍線部(ア)～(オ)の漢字と同じ漢字を含むものを、各群のa～eの中からそれぞれ一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

(ア)　サイカ

a　公正なサイバンが望まれる。
b　特売ではサイシン機器は売らないだろう。
c　彼女はさすがサイエンと言われるだけある。
d　サイナンに遭遇した。
e　肉食はサイショクよりパワーが出るそうだ。

(イ)　ケンエツ

a　理科のジッケンでデータを取った。
b　厳しいケンテイを通る必要がある。
c　義務が伴ってこそケンリがある。
d　ケンシン的な看護に頭が下がる。
e　生きていく上で一番大切なのはケンコウだ。

a シンシュが発見された。
b キョシュをしてから意見を言う。

（ウ） ショクシュ

c シュに交われば赤くなる。
d 自分のシュチョウを述べる。
e シュザイも礼儀が大切だ。

（エ） ケイゾク

a ケイケンの豊かさが人を育てる。
b 大型イベントにケイゴは欠かせない。
c 他人にはケイイを払いたい。
d あれはケイカク倒れに終わった。
e 各地を結んでチュウケイした。

（オ） キヒ

a ヒジョウグチは各階にある。
b オウヒは国民から敬愛されている。
c ヒナン訓練が実際に役立った。
d 有機農法ではタイヒが役立つ。
e ついにヒガンを達成した。

問二　本文中の空欄 A ～ E に入る言葉として最も適切なものを、つぎの各群のa～eの中からそれぞれ一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

A　a　偶然的　b　必然的　c　先進的　d　突発的　e　部分的

B　a　革命　b　農業　c　国防　d　生産　e　平和

C　a　楽観主義　b　現場主義　c　悲観主義　d　社会主義　e　全体主義

D　a　認定　b　推奨　c　併存　d　確立　e　存在

E　a　衰退　b　規制　c　自立　d　模倣　e　隆盛

問三　傍線部①に「モダン・ライフ」とあるが、筆者の説明として最も近いものをつぎのa～eの中から一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

a　モダン・ライフは、現代の日本的文化の代表として位置付けられている。

b　二〇年代の日本文化を支えたのは、都市を中心に大衆化され消費の文化となったモダン・ライフである。

c　モダン・ライフは三〇年代に入っても、社会の少数派だった。

d　三〇年代のモダン・ライフの表象を通して製作された劇映画から、戦争を予期させる要素を見つけることは難しい。

e　三〇年代の日本映画がモダン・ライフの多面性を視覚化したのは、社会が平和だったからである。

問四　傍線部②に「三〇年代は日本の資本主義が近代化した時期」とあるが、これにより変化したものを一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

a　男性と女性の賃金平等が実現した。

b　人々の革命願望の展望が見えてきた。

c　産業構造が変容して、定年制導入などの雇用の近代化が進んだ。

d　都市の家庭では、消費活動が次第に停滞した。

e　モダン・ガールは、現実の社会を反映して劇映画でも重要な役割を担った。

問五　本文中で筆者が述べている「日本映画」の特徴にあてはまらないものを、つぎのa～eの中から二つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

a　日本映画が平和に見える社会を映し出していたのは、資本主義を認めていたからである。

b　日本映画は現実の社会そのものを取り上げてスクリーンに映し出した。

c　二〇年代、三〇年代の日本映画は、結果的に資本主義を肯定することになった。

d　二〇年代の日本映画はモダン・ガールという社会の少数派を描いた。

e　日本映画は、その製作を通して戦争の悲惨さを訴え続けた。

〔三〕 つぎの文章を読んで、後の問いに答えよ。

交通機関が発達し、新幹線が出来、飛行機が飛び交う現在、旅は旅行に様変わりした。旅のような(ア)ユウチョウなことは時代遅れだ。忙しいスピード時代の今日、もっと颯爽とデラックスに、カメラを肩に旅行鞄を持って特急列車に乗り込む、そんなイメージが旅行という語には感じられる。それでも旅は日本語として、「旅の疲れ」だの「旅枕を重ねる」だの、旅路、旅の空……と定着している。

西行や芭蕉のような、旅をすみかとするような生活をした者は、もちろん行脚(僧が諸国をめぐり歩いて修行することから転じて①徒歩でほうぼうを旅すること)の旅であるが、そうでなくとも江戸庶民のお伊勢参りなどは膝栗毛であった。栗毛の馬に揺られる代わりに、自分の膝を馬に見立てて、徒歩の旅をしようというわけである。泉鏡花の『高野聖』にあるような一人旅なら、野宿をすることも度々だろう。これは草枕だ。草を枕とする旅の［A］ということだが、「旅」に懸る枕詞となり、旅そのものを指すようになる。夏目漱石の『草枕』もそうだ。

川や海ばかりは歩いて渡るわけにはいかないから、やむを得ず舟に乗る。渡し舟、あるいは渡しで、その場所が渡し場だ。その昔、偽って京を旅して来たと嘘をついた者が、「では白川はいかがでしたか」と聞かれて、京都の白川とは知らないで、川とばかり思い込み、「いやあ、白河は夜船で渡ったから、全然知らないんですよ」と答えたという。何が起こっても気がつかぬほど深く寝入っていることを、［B］という。これも旅にまつわる日本語だ。

今は夜になればホテルに泊るか、夜行列車に揺られるかだが、当時は旅籠に泊ったものだ。旅籠とは読んで字の通り、旅の身の回り品や食糧を入れた籠で、その籠を置く宿屋のことを指すわけだ。現在はホテル、旅館、宿屋といった語が並用されるが、ホテルというと洋風の高級なイメージが、旅館だと温泉旅館街を連想し、宿屋というと何となく(イ)ヤボったく低級な宿を想像する。何々ホテルと宣伝しても、実質は旅館と変わらない宿もたくさんある。名づけとは摩訶不思議なものである。

旅で休むのも、ホテルならベッドだが、旅館や宿屋だと畳に布団を敷く和式だろう。座ったり寝たりするときの敷物、布団

を「しとね」(褥)と言った。草枕をしゃれて、「草をしとねに寝る」などと言うと何かコウガな感じがして、一流ホテルに泊るより高級な旅寝を楽しむ気持ちになる。これも言葉の魔術だ。敷布団が「しとね」なら、掛布団は「ふすま」(衾)。これを障子や襖の建具と混同してはいけない。もっとも、こうした和語はすっかり忘れられて、音読みの「産褥につく」だとか、「同衾」などという難しい漢語が生き残るのだから、皮肉なものである。

旅というと「道」が付いて回る。街道、松や杉の並木道、安藤広重の浮世絵『東海道五十三次』の道の様などが目に浮かぶ。もっとも東海道などというときの「道」は、今の北海道などと同じく行政上の区画で、道路ではない。道は獣道のような動物が通行する道筋から、畦道、山道、そして現代の高速道路に至るまで、さまざまだ。鉄道も鉄路などと称して、これも道の一種と見る。

ドロ道を荷馬車などが通ったあと、車輪が食い込んで出来たへこみの線を「轍」と言ったが、このような車の跡は現在ではあまり見られなくなった。せいぜいタイヤの跡ぐらいなものか。轍に雨水が溜まって小さな水溜まりとなり、水すましが泳いだり青空を流れる白雲を映したり、昔は自然がいっぱいあったものだ。今日はことばとして「古人の轍を踏む」などと難しい表現で残っているが、先を行く車のわだちについて進んで同じ道を行くことからきた比喩だ。砂漠や雪原だったらそうせざるを得まい。「同じ轍を踏むな」なら、先人と同じ過ちを繰り返すなということになる。とにかく轍は車輪がつけた跡のことで、よく一般に誤解されている車輪の輪もしくは輪を締めるたが(箍)ではない。だから、「わだちの跡」という言い方は誤りである。なお、「たがが緩む」というのは、緊張がゆるんでいることの比喩である。車輪の話が出たから、ついでに触れるが、中心の心棒(これを軸、もしくは車軸という)がはまっている丸い軸受けの部分を「こしき」(轂)、そこから放射状に出て周囲の輪を支える棒(スポーク)のことを「や」(輻)と呼んだ。このような語はもう死語となってしまったが、「車軸を流す」といったような表現で、まだ細々と生き残っている。

さて、道は人の通るべき所だから、意味が抽象化して、人が踏みはずしてはならぬ人生の在り方や生き方、さらに道徳となる。「人としてあるべき道」「道にはずれた行為」、さては「転業こそ農家の生きる道だ」など、取るべき方向の意味にまで広がる。

「道」は〝言う〟という意味が一方にある。報道だとか、唱道、「論敵を道破する」などからも想像できるが、「言語道断」これも〝ことばで言うことを断つ〟、つまり口で言い表せないほどの深い仏道の究極の真理。それが転化してマイナスの事柄に限られ、もってのほかのことを指すようになった。

ところで、「旅は道づれ、世は情」と言う。この世は一人で渡るものではない。「袖すり合うもタショウの縁」(オ)で、人との繋がり、関係、そしてこの世のすべては前世からの因縁で、偶然の結果ではないという。人生の旅も人とのめぐり合い、人様の助け、そして人間同士の縁がなければ道を踏みはずすことにもなりかねない。旅、道、人生、さらに人の幸せというものは、共通の根を持つ不思議な関係にあるようだ。

「縁は [C] なもの味なもの」

と言う。これは男女の縁の思いがけなさを言ったものだが、縁とは、この世で因果関係を起こさせている何かの事情だ。多くは人間同士の関係だから、そうした関係を起こすよう仕組む自然の意志とも言える。

「縁があったらまた会いましょうや」

縁がなければ永久に会えないかもしれない。二人が結婚するようになったのも、ある先輩と知り合いになれたのも、師弟の間柄となれたのも、ある会社にホウ職(カ)するようになったのも、すべて縁があったればこそと考える。「縁組み、縁談、縁結びの神……」。この語を使ったことばは多い。何と他力的な思想だろうか。

縁は昔「えにし」とも言った。「えにしあらば」といった表現は和歌などでよく登場する。未来における事柄は縁のあるなしに左右されているのだから、もし幸いにも自分にその縁があれば、というわけである。

縁に似たことばに「ゆかり」がある。「縁もゆかりもない」などと使うが、両語に意味の差はほとんどない。多少の繋がりを持つ関係という気分の語で、「漱石にゆかりの地を文学散歩する」などと使う。「よすが」も繋がりを持つ関係という点で同類だ。現在では「いただいた記念のお写真を思い出のよすがとして、大切にしたいと存じます」など、あることを持続するため、それ

と関係のある事柄を手掛かりにすることである。ただ人間関係という意味で「よすがを求めて郷里を出る」など、今日ではあまり使われなくなった用法だ。「よすが」とよく似た「よるべ」は③「よるべない身」など、よく言う。

このような〝関係〟を表す言葉が、日本語にはやたらと多い。人間関係、それを蔭で支配している運命のようなものを認め、もろもろの事は目に見えぬところで糸を引いて繋がっているという思想、これがこの手のことばを数多く生み出す原因となっているようだ。

自然の中の掟（おきて）は一種の「理（ことわり）」である。「事を割って話す」など言うときの「事を割る」は［ D ］つまり物事の筋道、道理の関係が「ことわり」だ。このような論理的な語も古来、日本語には存在したのである。もちろん、それを理屈としてでなく、〝事を割る〟と考えるところに、いかにも日本的な［ E ］発想があるのだが、このような論理の因果関係は、また別に「由（よし）」か「故（ゆえ）」「訳（わけ）」のような抽象語を生んだ。

「由」は物事の事情を事の本質に結びつけ、事寄せて理解することばだ。人から聞いた話など、外から入った情報が、ある事柄の理由づけや手掛かりとなっているときに用いる。これが「知る由もない」などの例になると、「わけ」と近づく。理由、正当な事情という意味だ。

それに対し「故」は、同じ理由・根拠にしても、口実やかこつけ意識は消えて、もっと客観的な原因や理由を目ざしている。日本語は論理性に乏しいとか情的だとか言われるが、結構このような論理を表すことばが発達していて、はっと目をみはるような場合が多い。要は、これらの語を上手に使いこなすことだろう。

（森田良行『日本語をみがく小辞典〈名詞篇〉』より。ただし原文の一部を変更した。）

問一　傍線部(ア)～(ウ)、(オ)のカタカナにふさわしい漢字を、つぎの各群のa～jの中からそれぞれ二つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

(ア)　ユウチョウ　a 憂　b 誘　c 悠　d 猶　e 勇
　　f 腸　g 長　h 調　i 丁　j 重

(イ)　ヤボ　a 野　b 弥　c 屋　d 夜　e 邪
　　f 募　g 慕　h 暮　i 簿　j 墓

(ウ)　コウガ　a 皇　b 厚　c 興　d 高　e 幸
　　f 賀　g 雅　h 華　i 花　j 佳

(オ)　タショウ　a 他　b 誰　c 汰　d 手　e 太
　　f 少　g 正　h 小　i 尚　j 生

問二　傍線部(エ)、(カ)のカタカナの部分にふさわしい漢字を含む文を、つぎの各群のa～fの中からそれぞれ一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

(エ)　ドロ道

a　荒れ地を開コンする。
b　ト炭の苦しみを味わった。
c　原油のマイ蔵量を調査する。
d　ネン土は陶器の原料になる。
e　デイ炭は石炭の一種である。
f　オ辱を被ることには我慢できない。

a　楽器をカナでる。
b　神父が祈りをササげる。
c　患者のカタワらに付き添う。
d　よろしくお願いタテマツります。
e　カンバしい成績を残すことができなかった。
f　こういうときこそ、あなたの恩にムクいたい。

（カ）　ホウ職

問三　傍線部①の「徒歩（かち）」と「拾う」を結んだ「徒歩を拾う」とは、どのような意味か。つぎのa～fの中から最も適切なものを一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

a　歩いて行くこと　　b　立ち止まること　　c　近道をすること
d　小走りをすること　　e　回り道をすること　　f　背負ってもらうこと

問四　傍線部②の「車軸を流す」とは、どのような意味か。つぎのa～fの中から最も適切なものを一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

a　深い痕跡が残ること
b　雨が激しく降ること
c　理論が強固に構築されていくこと
d　短時間で周囲へ風聞が広がること
e　四方八方へ良い効果が広がってゆくこと
f　一点の不具合が原因で全体が壊れていくこと

問五　傍線部③の「よるべない身」とは、どのような意味か。つぎのａ～ｆの中から最も適切なものを一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

ａ　誰からも頼りにされない身のこと
ｂ　他人の助けを必要としない身のこと
ｃ　周囲の人達との関係が悪い身のこと
ｄ　心をなぐさめてくれる人がいない身のこと
ｅ　良い人間関係を築くことができない身のこと
ｆ　頼りにして身を寄せるところのない身のこと

問六　つぎの文中の傍線部に「縁を引いて」とあるが、「縁を引く」とは、どのような意味か。つぎのａ～ｆの中から最も適切なものを一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

第一、第二、第三と知らぬ間に心変りがしたようなものの、変りつつ進んで来た、心の状態は、うやむやの間に縁を引いて、擦（ず）れ落ちながらも、振り返って、もとの所をしたいつつ押されて行くのである。

（夏目漱石『坑夫』より。）

ａ　関係から手を引くこと
ｂ　昔からの縁を忘れること
ｃ　ある関係でつながること
ｄ　事件の因縁が尾を引くこと
ｅ　何かしらの縁を探し求めること
ｆ　周囲とのつながりをなくすこと

問七　本文中の空欄 A ～ E に入る最も適切なものを、つぎの各群のa～fの中からそれぞれ一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

A　a 宿坊　b 寝所　c 無宿　d 安寝　e 宿営　f 仮寝

B　a 京都白河　b 京都夜船　c 夜船京都　d 夜船白河　e 白河夜船　f 白河京都

C　a 奇　b 希　c 異　d 命　e 妙　f 邪

D　a 不都合な事情を思い切って公にすることである。
　　b 不条理を明らかにして、詳細を報告することである。
　　c 事の筋道をつけて、理路を整えて説明することである。
　　d 事の経緯を調べて、不合理な事情に反発することである。
　　e 事の道理に背く筋道を消して、経緯を収斂して解釈することである。
　　f 複雑な事情を幾筋かに分けて、一つ一つを事細かに分析することである。

E　a 主観的　b 観念的　c 理念的　d 理想的　e 即物的　f 理論的

問八　つぎの文中の空欄 F ～ I を「由」「故」「訳」のいずれか一つで補うとき、最も適切な語はどれか。「由」の場合はa、「故」の場合はb、「訳」の場合はcをマークせよ。

「……で甚だ恐縮な F ですが、妻も留守のことで、それも三四日中には屹度帰ることになって居るのですから、どうかこの十五日まで御猶予願いたいものですが、……」

「出来ませんな、断じて出来るこっちゃありません！」

（葛西善蔵『子をつれて』より。）

文学上に於ける感覚と云うものは、少くとも論証的でなく直感的なるが G に、分らないものには絶対に分らない。これが先ず感覚の或る一つの特長だと煽動してもさして人々を誘惑するに適当した詭弁的独断のみとは云えなかろう。

（横光利一『新感覚論』より。）

その料理屋には、神前挙式場も設備せられてある H で、とにかく、そのほうの交渉はいっさい小坂氏にお任せする事にした。また媒妁人は、大学で私たちに東洋美術史を教え、大隅君の就職の世話などもして下さった瀬川先生がよろしくはないか、という私の…

（太宰治『佳日』より。）

本義などという者は到底面白きものならねば、読むお方にも退屈なれば、書く主人にも迷惑千万、結句ない方がましかも知らねど、是も事の順序なれば、全く省く I にもゆかず。因て成るべく端折って記せば、暫時の御辛抱を願うになん。

（二葉亭四迷『小説総論』より。）